

# 教団新報

定価 1部140円(本体133円+共200円)  
 予約購読料 1年分 5,000円  
 紙代のみ 3,500円  
 振替 00140 9 145275  
 本紙を購読ご希望の方は、前金を  
 そえて、お近くのキリスト教書店  
 へお申し込み下さい。  
 教会の購読料は負担金に含みます。

発行所 日本基督教団  
 169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18  
 日本キリスト教会館内 電話 03(3202)0546  
 FAX 03(3207)3918  
 発行人 内藤留幸  
 編集主筆 竹澤知代志  
 印刷所 株式会社きかんし



朝礼拝の後の祈りの時、冷気で心も引き締まる

## 日本伝道の幻に召されて

### 日本伝道150周年記念大会 中高生・青年献身修養会

#### 全国から100名を越える参加者が

こういっわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。(ローマの信徒への手紙 12章1節)

中高生・青年献身修養会が、プロテスタント日本伝道150周年記念大会として、2009年8月18〜20日、全国教会青年同盟・西日本教会青年同盟共催で、軽井沢恵みシャレーを会場に開催された。

0年に設立されて以来青年伝道の使命に仕えてきた全国教会青年同盟と、同趣旨で1998年に設立された西日本教会青年同盟の共同企画における最初の集会でもある。

不変の主題「キリストと教会に仕える」(ローマ12:1)のもとに、副題「日本伝道の幻に召されて」を掲げ、これからの日本伝道に仕えるため、次世代の教会を担う献身者が起されることを願うものである。

講師に近藤勝彦氏(東京神学大学学長)、佐々木美知夫氏(日本基督教団総会副議長・静岡教会牧師)、チャブレンに小倉義明氏(聖学院院長)を迎えた。

また1日目の讃美特別ゲストとして小坂忠氏(シンガポール・牧師)を迎えた。中高生と青年の講演・分団等は別であったが、各礼拝と夜のプログラムは合同で行なった。

1日目は開会礼拝より始められ、青年修養会講演では、佐々木氏が「使命を得て生きる幸い」と題して、次のように語った。

「信仰を持ち、教会の枝とされる者は、キリストの御体である教会が持つ使命を自分のものとして与えられ、それ以外は外すことのできない大切な石として教会に積み上げられ、主によってその使命を果たすこと

を通し、各個教会も教団も主の御業を進めてゆく」「キリストと教会に仕える」意味が示された。

また自身の信仰の歩みからも、「何と幸いな人生であるかと思う。ここに集められた一人ひとりも教会の枝とされ、教会の使命を共に担う聖徒の交わりとして、自分の人生を得て、喜びを持って進んで頂きたい」と語った。

2日目、講演では、近藤氏が「この世界に礼拝がなされ、礼拝の群れが育てられるために」と題して、概略的に語った。

「青年時代の悩みから、人生に死よりも確かなものはあるか」と問い、教会の礼拝へ導かれた。世界の主「歴史の主」「万物の主」であるキリストが共にいて

くださることの「救い」を知らされたことを通し、キリストが「死よりも確かなもの」であり、人生の力であることを教えられた。

キリストの救いは神の国の福音であり、教会の礼拝を通して宣べ伝えられる。そのためにキリストに召された私たちは、礼拝に生き、礼拝に仕え、礼拝する群れ

に奉仕すること、キリストと教会に仕えることができるのである。

その間、2回の分団により、講演の内容を深め、さらに自由時間も語り合い、交わりを深めている姿も多く見られた。

1日目の夜は、小坂氏のコンサートを通し、キリストに生かされている喜びと

に、佐幕派の人々にも福音は伝えられ教会が立てられた。主の和解と一致の福音伝道は、私たちの人生が用いられて進んでゆくことと語った。やはり分団を通して参加者相互の親睦と講演内容が深められた。

この修養会のクライマックスは聖別会である。一人ひとりが、主が呼びかけられたことに「応答の言葉」をもって応え、献身修養会で得た恵みを分かち合った。受洗の決意、伝道献身の決意など、新しい献身の決意に満ち溢れた時となった。主の派遣命令によって、恵み溢れる思い、大きな喜びと感謝を抱かされて、再び各地の教会に仕えるために派遣されていった。

私たちの救いのため献身者の中から多数の献身者が起されるとき、日本の教会が変わり、のみならず日本全体が変わる」と語った。

参加した中高生・青年たちが、21世紀の日本伝道を担う者として今後も神が育てて下さることを祈る。

(松本のぞみ報)



大きな喜びと感謝を抱かせられて

#### お会いしましょう

「キリストこそ わが救い」これは、プロテスタント伝道150周年記念行事の標語です。聖書66巻を一言で言い表す言葉として、まことにふさわしいと思います。この標語のもとに、記念式典に集い、喜びを共にしましょう。聖書の歴史も、教会の歴史も、大切な節目では、みんなで集い、讃美し、祈ったのです。

「ありがとう 150年 つなごう 2000年」

これは、信徒大会の標語です。全国の

信徒が信徒の名で呼びかけて一堂に会するのは40年振りになります。そこでの祈りは、ありがとう、つなごう、です。

継ぐ責任を集うこと示しましょう。

「同道いたしました教会員も記念礼拝の素晴らしさに感激しております」

これは、すでに実施された創立記念日礼拝で表彰された教師の礼状の一部です。この喜びを全ての教職・信徒で共有しましょう。

11月22日(日) 東京山手教会で  
 11月23日(祝) 東京青山学院で  
 お会いしましょう。

伝道150周年記念行事 準備委員会委員長 小林貞夫

プロテスタント 日本基督教団 日本伝道150年

## キリストこそ 我が救い

日本基督教団 日本伝道150周年準備委員会

<p>↑ 日本伝道150周年記念 信徒大会</p> <p>2009. 11.22 18:00~</p> <p>日本基督教団 東京山手教会</p>	<p>↑ 日本伝道150周年 記念式典</p> <p>2009. 11.23 10:00~</p> <p>10:00~ 礼拝          ハンドベル演奏          14:00~ 講演1          17:00~ 講演2</p> <p>青山学院 講堂</p>
--	--

許すかも知れない。しかし、一度三度と重なったら、もうたくさん、アドバイスに従う気がないのなら、初めから相談なんかしないで、愚痴も言わないでと思うだろう。教会も道を間違えることがある。迷子になることもある。しかし、その都度、不思議な声に導かれて、正しい道に立ち帰って来た。聖書の神さまは、ナビよりも遙かに忍耐強く、人間と接し語りかけて下さった。今も教会に、祈る者に、語りかけて下さる。機械のナビに感謝する前に、神さまに感謝しないと。

### 荒野の音

車にナビが入った。とてもありがたい。安心して運転できる。途中に寄る所があったり、ナビの指示に従わない場合がままある。それでも、小言一つ言わないで、新しくルートを検索し、その場所からの指示を出してくれる。同じことが重なっても、投げ出したりしない、何度でも、検索し直し、新しい指示を出してくれる。健気さと思われる。感謝している。自分が同じ目にあつたらどうだろう。せつかく親身になって考えアドバイスしたつもりなのに、それを無視されたら、一度や二度は、

# eAst21asia 第2回国際会議

## すべて教会青年有志による企画・準備のもと

### 東アジアにおける10年後の教会像を描く

eAst21asia第2回国際会議が8月1日、与町本郷教会を会場に開催された。eAst21asiaの活動主眼は、東アジアにおける10年後の教会像を描くことにある。クリスチャン青年として共通の課題がある。国境・教派を越えた学びと交流による相互理解、伝道を通して信仰を深めたい。そして平和を希求し、真の契約共同体としての自由な市民社会の形成を志向することが願われている。

昨年引き続き2回目となる国際会議も上述の趣旨を活かして開催された。特筆すべきはすべて教会青年有志によるボランティア・アシエーションとして企画・準備が進められたことである。また今回の国際



参加者の輪が巨大な渦を描き、一致と連帯を象徴する

会議準備には東京台湾教会の青年も参加した。当日のプログラムは、開会礼拝をもって開始された。3ヶ国語対訳のプログラムが用意され、韓国からの参加者11名を加え、言語は異なっても、同じ主を讃える100名超の参加者の歌声が礼拝堂に響きわたった。岩田昌路牧師(狛江教会)が「自分の体

で神の栄光を現しなさい」と説教、神学生時代の訪韓を通して、献身の姿勢を再度確認させられたことを語り、御言葉を取次いだ。青山学院大聖歌隊・ハンドベルによる演奏奉仕がなされた。

引き続き「隔ての壁を越境するキリスト者」との題で嶋田順好牧師(青山学院大宗教主任)が講演した。寄留者であった旧約信仰者の列伝から、新約における使徒パウロへと語り進んだ。パウロの生き様に参加者の課題と使命が重ね合わされた。そしてキリストのものとして究極的アイデンティティの故に国家、民族、歴史、言語等の「隔ての壁」を越え、アジアの伝道と和解と一致の

ために協働し祈り仕えることへの希望の言葉をもちて結んだ。

昼食と参加者教会紹介の後、ゲーム等で全身を使い交流を深めた。各国から演奏や合唱が披露されたが、最後は台湾の讃美歌に合わせ参加者の輪が巨大な渦を描き、あかもグローバリゼーション時代における信仰者の一致と連帯を象徴するかのようであった。

交流が深まったところで4名の参加者より発題がなされた。クオン・ヨンウク氏(韓国セムナン教会員)は、「両班」という韓国の伝統的家系の長男として生まれ、しかし5代前からキリスト者家庭となったこと、を巡り、伝統的祭儀とキリスト教信仰との間に生じた

軋轢、親族交際の難しさなど伝道実践について語った。次に田村寿子氏(相模原教会員)はキリスト教教育機関を通して教会に導かれ、大学推薦入試を機に受洗したこと、教会共同体の祈りを通じて家族伝道が神の御業となされていくことを喜びつつ証した。

続く松永尚真氏(東京台湾教会員)は、現在は日本に帰化した台湾人としてアイデンティティを持つ者として、台湾宣教の礎となったマカイ博士の功績を振り返り、愛さなければ、それが永遠の住みかとなるのだ」との彼の言葉と自身の境遇を重ねて発題した。

4人目の朴大信氏(千歳船橋教会員)は、在日コリアンであり、クリスチャンホーム育ちと自己紹介し、日本における二つのマイノリティの要素の自覚と葛

藤、そして統合過程を、主イエスからの招きに対する信仰者の応答として語った。

これらを受けて、10グループに分かれてディスカッションのときもたれた。グループ分けは各国参加者が知り合うことができるよう細やかに配慮され、英語使用のグループも設けられた。そこではキリスト教と伝統文化、信仰生活と社会生活など各国で直面する悩みが率直に語られ共有された。同時に各々の歴史文化の相違、戦争も含む東アジアの現代史についても語り合い、その上でキリスト者としての協働の可能性、将来の幻について、豊かな語り合いがなされ、討議終了時には各グループで祈りのときもたれた。熱心さのあまり予定時間を超過するグループが続出する一幕もあった。

閉会時には会場教会の菅原力牧師が挨拶、学生伝道を祈りの課題とした与町本郷教会創設の由来を紹介した後、祈禱をもって会を締め括った。

キリスト者青年の協働が東アジアの将来を新しく形成する、大きな信仰的希望を与えられた一日であった。(松本周報)



東後勝明氏の講演を感銘深く聞く

7月21日(火)から22日(水)にかけて日本盲人キリスト教伝道協議会(以下盲伝)第36回定期総会が、22日(水)から23日(木)にかけては第59回全国修養会が、全国身体障害者総合福祉センター「戸山サンライズ」で開催された。

2年に1回開かれる総会と全国修養会としては、実に30年ぶりの東京での開催となった。

## 日本盲人キリスト教伝道協議会 第36回定期総会、第59回全国修養会開催

全国から総会に約80名、修養会に110名の会員が集まり、盲伝の今後のことを考え、学び、交わりの時を持った。

総会では会員の高齢化や会員数の減少などが、現在の課題として挙げられた。

この総会で、議長に日高馨輔氏(日本聖公会東京教区退職執事・盲)、副議長に鳥羽徳子氏(日本基督教団神奈川教区巡回教師・

晴)、書記に近藤敏郎(日本基督教団信徒・盲)、岩本和則(日本基督教団名古屋中村教会牧師・晴)の両氏が選出された。また新規約に基づいて新しい理事が選任された。

修養会の講師には日本の英語教育の第一人者である東後勝明氏(早稲田大学名誉教授)が招かれ、2日間に亘って生い立ち、英語との出会い、キリスト教との

出会いなどを語った。

最初に英語を習ったのは教会であったにもかかわらず、その後キリスト教から遠く離れており、同級生たちが英語の聖書を読んで勉強する中、一人だけ聖書を讀まなかった人間が、家庭の問題や本人の病を通して、キリストに立ち帰ることになった経緯が感銘深く語られた。

証の時間では、渡邊誠二とモ( )ゴスペル・リーダーの指導の下、難曲にチャレンジ。耳だけを頼りに3部合唱を行った。そのできは指導に当たったリーダーも驚く程。

曲の間に2名の会員の証がなされた。視覚障害を持ちながら教会役員、会堂建築委員長を務めているという兄弟は、「目が見えず、顔が見えない自分に会堂建

築委員長は無理だと思ったが、会堂が建つと信じ続けること、祈り続けることはできる。それが委員長としての役割と信じて引き受けた。その結果、様々な配慮をいただき、現在までは支障なく役目を果たさせていた。だいたい」と証し、何事にも臆せず関わっていくことで、可能性が開けることを示した。

総会、修養会ともに会の雰囲気は明るい。良く祈りが献げられ、良く賛美がなされる。超教派の会であるため、その賛美も聖歌から讃美歌21まで多岐に亘った。出席者はみな積極的で、



会堂建築委員長としての経験を生き生きと語る

活発である。初めて盲導犬とふれあった晴眼者会員が、その介助を通して、盲導犬への理解を深める場面も見られた。

(辻順子報)

今まで守られてきた骨太な信仰を、次の世代にも伝えていくことを希望とし、それぞれが帰途についた。

# 知識だけではなく、出会いのチャンス

## 第22回神学校等 人権教育懇談会

6月29日(月)、日本基督教団の部落解放センター主催による第22回神学校等 人権教育懇談会が日本聖書神学校で行われた。神学校神学大学、大学神学部、部落解放センター、教会から11名が出席し、学びの時をもった。

プログラムは、部落解放センターの活動委員をして、高石教会の一木千鶴さんの「聖書と差別について」- 出会いの中で考え



テーマを十分に深めるには、もう少し時間をかけ

「させられてきたこと」と題する発題で始まった。一木さんはルカによる福音書にあるラザロの物語(16章9節)を朗読し、その後「自身の30年にわたって伝道師・牧師としての歩みの中で、いかに部落差別と関わり、学んできたのかを語った。

一木さんからは神学校からの出席者に次のような希望が出された。神学校では部落差別の知識だけではなく、実際に出会いのチャンスを学生に与えてほしい。

学生を部落解放センターに連れてきている神学校もあるが、他の神学校も是非そうしてほしい。こうした出会いによって、差別と取り組んでいる人々をしっかりと理解し、神学校卒業後、各地での活動に積極的に参加

2009年7月19日(日)午後2時半~5時 埼玉県大宮教会において、埼玉地区壮年部の修養会が行われ、信徒・教職70名が参加した。

第一部開会礼拝 正田國磨呂牧師による説教「すべ

# 主題「これでいいのか? 今の教会」

## 関東教会・埼玉地区壮年部修養会

ての民をわたしの弟子にしなさい」に続き、第二部修養会は、「教団50年データ」の上映から始まった。

映像に映し出されたグラフによる教団の姿は深刻なものがあるが、正田國磨牧師は、今年大きく変化した教団の数字を挙げながら以下のように語った。

従来、関東教会は17教団のうちでも、それ程悪い方ではなく現状維持か、変動率が極めて小さい教区であった。それが、今年の教区総会できつくりする数字が現れた。つまり、この二年間で教団の数字が落ちて

た。詩編23編が朗読され、「たとい死の陰の谷を歩む」と題するメッセージでは、ホーリネスの群れの弾圧についてふれられ、主は羊飼い、主こそが家庭においても国においても主権者であることが強く語られた。

その後、日本聖書神学校の鈴木脩平さんから日本聖書神学校での人権教育についての発題「神学校の人権教育の取り組み」があった。人権教育のフィールド

戦争についての考えを示し、和解を求める必要があり、和を指摘された。戦争責任の問題を取り扱うために、日本のキリスト教がたどってきた背景である日本の近現代史を学ぶ必要を感したようである。また、社会問題への意識を高めることは必要だが、そのためには内的・霊的なものが不可欠であり、現在の神学校教育の問題として、霊性よりも知性重視の傾向があることを挙げられた。教会に

## 東 海

### 新たな伝道の気運を

小出 望

最初に、過ぐる8月11日に駿河湾を震源に起きた地震につきまして、各教区よりお見舞いをいただき、心から感謝申し上げます。被害は軽微でしたが、当初は気が付かなかった被害が見つかったり、各教会の被害状況を改めて問い合わせられているところです。

さて、5月に行われた東海教区総会では、互助制度の新しい案が採択されました。財源不足と互助申請教会増加に対応するために、

## 教区コラム

教区として行う互助の規模を84%に縮小したのです。

東海教区は伝道を大切にしている教区です。機構改正をせずに、伝道部の中に青年、婦人、農村伝道等の専門委員会が置かれていることにもそれがうかがえます。その故でしょう、昨年教団財務委員会が制作したDVDで、最も健全な財政・教勢の教区とされました。

互助新制度は2011年度から施行されます。互いに顔の見える互助にするためにも、この機会に地域の伝道のために分区分や地域の教会が積極的に協力できるようにしたいのです。そのためには、一つのキリストの体としての一体感が何よりも大切になります。福音理解と教会観の一致が必要です。

先日、篠ノ井教会の畑で、春に旧四役で植えたジャガ芋を、沢山の助っ人を得て新四役で収穫しました。先に篠ノ井教会から提供されたタマネギと共に、売り上げが互助のために用いられます。各教会で、美味しいカレーを食べながら、互助が覚えられます。ささやかな協力伝道の種蒔きです。

(東海教区総会議長)



厳しい状況のもと、希望を見出すべく

映像の提言「教会に帰ろう」。別帳会員の掘り起こし。沢山の卒業生を出している教会学校の卒業生。そういう人たちが、中年、壮年期になって、どうやって帰ってくるのが出来るか。帰ってくる人たちが、帰り易い教会、ウエルカムと受け入れ態勢が出来ているかどうか、帰ってきた時に、心からお互い赦しあうこと、主を誉め讃えることの出来る礼拝を、私たちは捧げていることが出来るかどうか。帰ってくるために

## 消息



石井裕二氏(隠退教師)

8月8日、逝去 78歳。大阪府に生まれる。64年同志社大学大学院を卒業、関東学院大学神学部主任、後、ハーバード大学留学、69年同志社大学神学部主任、01年隠退した。遺族は妻・多恵子さん。

## 事務局報

- 教師異動
- 東京聖書学校吉川 辞主 西海満希子
  - 就兼主 深谷春男
  - 就兼担 深谷美歌子
  - 松山城南高校 就教 辻村佳子
  - 長門 辞代 鈴木恭子
  - 就主 上原芳子
  - 広島キリスト教社会館 辞教 小林千加良

世界宣教委員会からの訂正・お詫び

世界宣教委員会編、共に仕えるために、二〇〇九年一〇一〇年版「22ページのトップ見出し」が「オランダ」を「ベルギー」と誤記し、33ページ「あしが」の11行目「小井沼眞樹」を「小井沼眞樹」に訂正いたしました。お詫びして訂正いたします。

- 広島女学院大学 辞教 斎藤仁作
- 有田 辞主 福永秀光
- 辞担 末瀬昌和
- 辞担 末瀬喜美子
- 伊万里 辞兼主 福永秀光
- 富士宮 辞主 笠岡 良
- 就主 福永秀光
- 田園調布 就担 笠岡 良
- 上山 辞代 石井美琴
- 就兼主 立花則彰
- 名張 辞主 梁 在哲
- 就代 加藤幹夫
- 城之橋 辞代 中島信義
- 就主 浦上 充
- 金沢 就担 阿部倫太郎
- 瀬戸永泉 就担 小椋実央
- 八日市 辞担 川上 潔
- 近江野田 辞代 川上 潔
- 就代 川上 信
- 湯河原 辞担 友川 栄
- 下関丸山 辞主 上垣旅人
- 就主 友川 栄
- 行橋 就主 村岡博史
- 就主 上垣旅人
- 推田 辞兼主 村岡博史
- 就兼主 上垣旅人
- 弘前 就主 村岡博史

# 献身のとき

NOOSHIN  
KENSHIN  
TOKI

No.6



## 我に従い来たれ

足田國磨 氏 (大宮教会牧師)

「この人による以外に救はない。わたしを救いうる名は、これを別にしては、天下のだれにも与えられていないからである。」

(使徒行伝 4 章 12 節口語訳)  
私が羽咋教会の門をたいたのは 1961 年の初春、18 歳の時でありました。思い切った教会の玄関に入る。兄のような若し杉山謙治牧師が迎えて下さり、無我夢中に自分の悩みを訴え、聞いていただきました。「足田さんの問題はなかなか難しいです」と言われて、佐古純一郎先生の著書『現代人の不安と苦悩』という本を手渡されました。そして次の週から礼拝に出席するようになりました。

私の悩みは「自分は本当に親に望まれて生まれたのか」という問題でした。4 人兄弟の末っ子で母の 40 歳の時の子供で、妊娠したから仕方なく生まれたのではないかと自分の出生に疑問を持ったのでした。限りなく虚無的になり、勉強も手に付かなくなり、高校を退学し、自殺も考えました。そんなある朝、ルーテルアワーのラジオ放送の話に心を動かされ、招きの言葉に促されて、羽咋教会の門をたたいたのです。

杉山牧師から、「足田さんは、神に祝福されたから、両親から生まれたのです」と創世記 1 章 28 節を示された時は驚きでした。私の父は日蓮宗の檀家総代をする熱心な仏教徒の家でした。私が信じて来たのは、呪い、祟り、罰を与える神仏でした。それゆえ「人間を祝福して下さる神とはどんな神なのか、その神を知りたい」と私の求道が始まったのです。

人間を祝福する神を求めて十ヵ月余り、同年 12 月 24 日 (日) クリスマス主日礼拝で、「イエスはキリストです」と信じバプテスマを受けました。冒頭の聖句は、杉山牧師が私に下さった御言葉です。求道中に守った礼拝は、司会兼任で講壇に立つ杉山牧師とオルガンを弾く杉山美智子夫人、ベンチに座っている私と 3 人で始まることとがしばしばありました。その年の礼拝出席は平均 6 人でした。洗礼式の夜、お祝いの夕食に招かれた時、美智子夫人が「実は、うちの人は牧師を辞任するつもりでしたが、足田さんが来られたので辞めることができなかったのです。洗礼を受けて下さってありがとうございます。うちの人はもう一度ここで牧師をやります決意をしました。」と泣いて感謝され驚きました。生きることをやめようとしていた者と牧師をやめようとしていた者が出会って一緒に礼拝を献げる中に、生ける復活のキリストが働いて下さいました。

私がキリストを信じて立ち上がり、牧師がもう一度やり直そうとして立ち上がりました。二人または三人が、わたしの名によって集

まる所には、わたしもその中にいるのである。(マタイ 18 章 20 節) という御言葉は私の信仰の原点であります。

どうしたら杉山牧師を助けて、羽咋教会のために仕えて行けるかと考えました。キリスト新聞の広告を見て、東京の鶴川の農村伝道神学校の酪農研修科で 2 年間学んで、酪農をしながら羽咋教会に仕えたいと決心し、杉山牧師より推薦状をもらって上京しました。しかし、川崎市にいる長兄の猛反対に合い、酪農研修科の入学は先送りになり、佐古純一郎先生のいる中渋谷教会を杉山牧師より紹介され、東京での信仰生活と苦学が始まりました。

神は、1963 年 1 月 3 日、インマヌエル綜合伝道団の新年聖会で、「我に従い来たれ、然らば汝ら人を漁る者となさん」(マタイ 4 章 19 節口語訳) との御言葉を与えて下さいました。それが私への召命の御言葉となりました。

その後、働きながら新宿高校定時制を卒業し、明治学院大学文学部英文科、東京神学大学神学科大学院を卒業して、日本基督教団の教師になりました。柿ノ木坂教会(東京教区南区 2 年 8 月)、福井神明教会(中部教区福井地区 10 年 4 月)、大宮教会(関東教区埼玉地区 22 年目)と任えて来ました。家族は、妻の勝子も牧師です。独り息子、義也は私が 42 歳、妻が 41 歳の時に与えられた、思春期の悩みに対する神様からの答えの子です。今、東京神学大学 3 年に編入学し、伝道者献身者として備えております。

### 出版局 ニュース

http://www.jp.usci.or.jp

#### ★キリスト教音楽講習会

8 月 25 日 (火) ~ 28 日 (金)、第 81 回キリスト教音楽講習会が開催されました。東洋英和女学院六本木キャンパス(主会場)、青山学院女子短期大学、聖ヶ丘教会、霊南坂教会(ハイブ・リード)の各会場のご協力のもと、約 100 名の受講生が学びの時をもちました。2009 年はカルヴァン生誕 500 年を記念し、全地よ、主に歌えよ(詩編 96 編より)の主題でプログラムが進められました。実技はオルガン(パイプ・電子・リード)・声楽・聖歌隊・会衆賛美に分かれ、ジュネーヴ詩編歌を中心に、それぞれ演奏技術と礼拝奉仕者としての心を学びました。その他、8 クラスに分かれたゼミ、全体合唱でも熱心な指導に導かれ、与那城初穂チャペレン(流山教会牧師)による「夕の山教会牧師」による「夕の山教会」で一日が閉じられました。

公開講座として行われた講演「カルヴァンの生涯を追う」(出村彰東北学院大学名誉教授)、2 回にわたる「詩編歌とカルヴァンの礼拝」では、「礼拝者」としてのカルヴァン像に迫り、詩編歌や当時の礼拝について学びを深めました。閉会礼拝は音楽礼拝として捧げられ、感謝のうちに四日間の学びを終えることができました。

#### ★教会会計ソフト開発中

多くの教会で、会計や教員名簿などをパソコンで管理されていると思います。しかし、既存の一般会計ソフトでは使い勝手や価格の面で満足できるものがなく、教会ごとに様々な工夫をしているのが現状ではないでしょうか。そこで教団出版局では、こうしたニーズに応える優秀なソフトを、全国の諸教会に提供しようと企画しました。プログラムの専門家が数年間かけてある教会の会計のために開発したものを、さらに様々な教会の状況に対応するよう改良を重ねています。エクスセルベースで動作も軽く、使やすさを追求しました。現在、予算決算委員会でも検討して下さい。推薦して下さることにになりました。

提供形式は、教団出版局が作成・製造・販売をし、開発者が初期サポートを行う。内容は、教会の会計全般(財産目録含む)・教員名簿・出席管理・献金管理はもちろんです。教団提出の C 表が自動的に作成できるようにになります。予定価格はソフト本体 2 万円、メール等による初期サポート料 1 万円の合計 3 万円(税抜き本体価格)。各個教会に特化したカスタマイズ・仕様変更や電話サポートは別契約・別料金となります。さらに使い易いよう、改良を進め、11 月上旬の発売を目指しています。

# ひととき

平本 善一さん

## 古稀からの召命



1930 年、中国・大連生まれ。明治学院大学院・東神大大学院卒。桜美林教会牧師。

大学に社会人入学が増えて来たことは、どの大学でも見られる現象だが、東神大では、近年とくに顕著なように思われる。09 年 5 月の学生数は、112 人(大学 74 人、大学院 38 人)で、年度によって増減はあるが、学部編入者を含めた大学、大学院の新生の半数近くを社会人が占める年もある。

広島大学に進んだ平本さんは、当時不治の病といわれた肺結核にかかり、大学を中退し療養生活の中で信仰を得た。回復後、弱者のために働くことを決意し、当時、福祉専攻では先駆的な明治学院大学福祉学科に修士入学し、大学院を卒業した。大学院卒業の際、恩師から社会福祉の現場に入ることを勧められ、バト博

が占める年もある。広島大学に進んだ平本さんは、当時不治の病といわれた肺結核にかかり、大学を中退し療養生活の中で信仰を得た。回復後、弱者のために働くことを決意し、当時、福祉専攻では先駆的な明治学院大学福祉学科に修士入学し、大学院を卒業した。大学院卒業の際、恩師から社会福祉の現場に入ることを勧められ、バト博

士記念ホームで福祉活動のスタートを切った。

以来、基督教児童福祉会、日本キリスト教児童福祉連盟、キリスト教社会事業同盟などに関わり、かたわら農伝の講師を務めるなど八面六臂の活躍で、児童福祉の分野では、現場を知る福祉者として知られた存在となった。その実績から、桜美林大学が福祉学科を創設した際、教授として招かれた。

教授生活 5 年間、70 歳で定年を迎え、「これで自由になった」と感じた平本さんは迷わず東神大入学を選択した。というのも、「長年、児童福祉に関わりあつて、問題を抱える子供たちに出

会ったが、そうした問題の多くが、親子関係の破綻から生じており、親もまた問題を抱えていることがわかった。その親を正すのは、霊的な導きがないと駄目だということがわかった」からだ。

修士入学、大学院と東神大生活 4 年間、あんなに勉強したこととはなかった。授業は楽しかったし、28 人のクラスメイトが本当に良くしてくれた」と述懐している。今春、平本さんは正教師となった。牧師生活を続ける傍ら、大学の特別講座、地元町田市の福祉関係の役職を依頼され、78 歳の今も愛車を駆って、活動を続けている。

## 積み重ねられる日々

教会備え付けの讃美歌に教会員が布の力パーをつけてくれた。表紙が弱っていた物もまた充分に用いられている。よく見ると備え付けの聖書も表紙の傷んでいる物が多い。何年、何回用いられてきたのだろうか。その姿には礼拝や祈祷会の積み重ねが刻まれている。

8 月 11 日、地震で若干の被害が出た会堂を片づけ、その状況を確かめる時に、50 年を経た会堂のあちこちに主を礼拝する日々積み重ねる強く感じたことである。ここで讃美が繰り返され、ここで祈りが積み重ねられ、ここで奉仕

が繰り返されている。教会はここで主を生かされ、出て行って主と人々に仕えている。この日も変わることなく、主が教会をお建てになり、私共を祝福して用いられている。私共は主の再臨の日に向かっている。また多くの人々に御身を証されるためである。私共の働きも人生もすべて主の再臨に結びつけられ、今日祈りすることの意味を持っている。(教団副議長 佐々木美知夫)